

琉球大学学術リポジトリ

大学教員における障害学生への障害理解の実態

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 敦士, 野原, 奈々子, Tanaka, Atsushi, Nohara, Nanako メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/1414

大学教員における障害学生への障害理解の実態

田中 敦士* 野原 奈々子**

Understanding for College Students with Disabilities in Professors

Atsushi Tanaka Nanako Nohara

琉球大学の全学部全教員を対象とし、教員の障害への認識・理解の実態を把握するための質問紙調査を実施した。その上で、障害学生への配慮に関する教員の意識、また大学に求められる支援等について現状を明らかにし、今後より良い障害学生の修学支援の在り方について検討することを目的とした。質問紙調査の回収率は759名中の189名で24.9%であった。回収率は低いものの、全体的に障害者に対して肯定的に理解しようとする傾向がみとめられた。今後障害学生の修学支援が進められるにあたって期待できる結果となったが、その一方で課題も明確となった。

問題と目的

1 障害者の高等教育機関への進学・在籍状況

近年の高等教育への進学率の上昇に伴い、大学・短大等に進学を希望する障害者も漸増傾向にあり、今後も障害者の大学等進学が進むものと予想されている（日本学生支援機構，2006）。国立大学協会（2001）が行った全国の国立大学99校を対象とした「国立大学における身体に障害を有する者への支援と現状に関する実態調査」では、過去3年間における身体障害を有する者（視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、その他一言語障害、病弱・虚弱等）の相談者数、受験者数、合格者数、入学者数はいずれも年々増える傾向にある。

また、日本学生支援機構（2006）による「大学・短期大学・高等専門学校における障害学生の修学支援に関する実態調査報告書」では、大学、短期大学、高等専門学校1,115校を対象とする質問紙調査を実施し（回収率90.5%）、障害学生数の実態をまとめている。それによれば、学校における

障害学生の在籍数は5,444人であり、全学生数（学校基本調査：文部科学省）に対する在籍率は0.16%（参考値）であった。また、大学（短期大学を含む）の学部にて在籍する障害学生数は4,494人で、同区分の全学生数に対する在籍率も0.16%（参考値）であった。

このように、全国で障害学生の高等教育機関への進学が進む一方で、その数は全学生のわずか0.16%にすぎないことも事実である。その背景には、障害のある学生が将来の進路の選択を考える上で、その障害ゆえに大学等への進学の道を狭められてきた現実があった。このことは、障害があることを理由にした受験拒否（殿岡，2004）や、大学で学ぶために必要な支援・援助が十分でないことへの不安によるものである。

富安・小松・小谷津（1996）は、「教育は労働力の有無、障害の有無に関係なく、あらゆる人間に等しく関わる問題であると言える。従って教育機会の公平性も、すべての人間、すべての国民に関わる問題である。障害者の修学といえども、障害者のみの問題ではなく、すべての人が自らの問

* University of the Ryukyus

** Okinawa Prefectural Awase School for Special Needs Education

題として考え、対応せざるを得ない」と述べている。「誰もがいつでも自らの選択で学ぶことのできる高等教育の整備（ユニバーサルアクセスの実現）」の観点からも、各大学において、障害学生を受け入れ、教育を効果的に行うため、個々の教員や一部の学生等の善意にのみ頼るのではなく、全教職員の理解のもとに、組織的な相談・支援体制を整備していくことが不可欠な課題となっている（旭，2004；佐藤，2004；鶴岡，2004；日本障害者高等教育支援センター，2004）。

2 障害学生の修学支援の現状

大学等における障害学生に対する修学支援は、受け入れを判断した大学等が当該障害学生、支援学生との協同により独自に取り組み支援している。しかし、それらの支援策は各大学等において個々に整備されたものであるため、必ずしも定型化されていないのが事実である（日本学生支援機構，2006；佐藤・徳永，2006）。

「大学・短期大学・高等専門学校における障害学生の修学支援に関する実態調査報告書」（日本学生支援機構，2006）の中での障害学生数を障害別内訳で見ると、視覚障害、聴覚・言語障害、肢体不自由、重複障害、病弱・虚弱、その他（精神障害、発達障害（ADHD、アスペルガー症候群など）、うつ病、パニック障害、種別不明）などその障害種は多種多様である。彼らが大学などの高等教育機関へ入学し、学んでいくには、ハード面（バリアフリー、器具、機材、教室環境など）やソフト面（高等教育機関側の受け入れ組織、運営、支援、授業など）からの支援（サポート）が必要不可欠である（大泉，2003）。

しかし、全国の高等教育機関を対象にした「大学内の支援（サポート）組織に関するアンケート調査」（鈴木，2004）では、障害のある学生に対する支援は多くの大学で行われているが、一部の大学ではまったく行われていないことが明らかとなった。また、障害学生を対象とした「障害学生実態調査」（全国障害学生支援センター，2002）では、障害学生を受け入れ、サポートする大学も増えつつあるが、現在あるサポート内容は多くの障害学生にとって十分とは言いきれないと指摘し

ている。障害学生が大学生活を送るための支援システムが不安定なことが大きな問題として挙げられている（日本障害者高等教育支援センター，2003）。障害学生は大学生活を送るために様々なサポートを必要とし、そのニーズは様々であるのに対して、障害学生の受け入れやサポートの状況は大学によって異なるのが現状である。

3 障害学生の支援者について

障害学生に対する支援（サポート）の内容は様々であるが、その中でも人的支援は大きな役割を果たしている。「障害学生実態調査」（全国障害学生支援センター，2002）によると、障害学生は様々なサポートが必要な中で、多くの場合大学教職員や友人など身近な人に依頼している。また、学生生活の中で問題が生じた時にも身近な人に相談して解決している。学生生活をよりよいものにするためにも、信頼して相談できる相談相手を持つことが大切であり、その関係が障害学生の心理面でのサポートとなり支えとなる。しかし、同調査の中では、障害学生が大学生活を送るうえで困っていること、改善してほしい点として、他の学生または大学教職員の障害学生に対する理解のなさを挙げており、信頼して相談できる環境にないことも事実である。特に大学教職員には、中立的立場で学生からの相談に応じ、障害学生の要望や意見を大学側に伝えていけるような相談サポート体制が望まれている。

4 琉球大学における障害学生支援の現状と課題

(1) 琉球大学における障害学生支援の現状

近年、障害学生に対する支援体制は社会的にも注目されるようになってきている。最先端の支援内容に取り組み、他の大学が目標にできるような大学も出てきている。また長年にわたり障害学生の支援に取り組み、十分なノウハウを蓄積してきた大学もある（殿岡，2005）。

全国障害学生支援センターでは、障害学生のための大学受験ガイド「大学案内障害者版」を1996年からほぼ毎年発行している。全国の大学に調査

を依頼し、回答のあった大学の障害別入試情報や入学後の配慮内容などを記載している。この中の琉球大学の情報を調べてみると、1997年データ(1996年7月～9月に調査)が『大学案内97年度身体障害者版』にて発表されている。内容は表1-1

表1-1 琉球大学における過去の受験・在籍の状況

- 受験した学生：あり 難聴、下肢障害(杖など)
- 在籍した学生：あり
- 受け入れた理由：受験の機会を平等に与えるため。希望があれば協議の上受け入れる。
- 問い合わせ：あり 受験の可否について、受験時の配慮や条件、入学時の配慮、施設・設備について、介助・介護の有無、カリキュラムについて。

表1-2 琉球大学の入試情報

- 視覚障害 受験：可 条件：あり 事前協議必要 入試上の配慮：あり 「センター特別措置」
- 聴覚障害 受験：可 条件：あり 事前協議必要 入試上の配慮：あり 「センター特別措置」
- 肢体不自由 受験：可 条件：あり 事前協議必要 入試上の配慮：あり 「センター特別措置」
- 内部障害者 受験：可否未定
- 知的障害者 受験：可否未定
- 学習障害者 受験：可否未定

表1-3 琉球大学のキャンパス案内

- ◎授業での配慮※工学部
- 配慮の方針：大学から教員に個別に協力を依頼している
- 一般講義での配慮あり
 - ・補助者(点訳者、朗読者、手話通訳者、ノートテイク、介助者等の同席を認めている)
 - ・録音機器の使用を認めている
 - ・補助機器の設置及び使用を認めている
 - ・座席位置を明るいまわりや前列に配慮する
 - ・板書の読み上げ
 - ・講義ノートをコピーして渡す
- 体育実技はない
- 実験での配慮あり：他学生を介助につける
- 実習での配慮あり：大学側が実習において必要な介助者等を準備する
- 実習での配慮あり
- ◎設備での配慮
- スロープ
 - ・教室(棟)、研究(棟)、事務(棟)、図書館、講堂、学生会館、食堂、ホール
- エレベーター(車椅子対応)：教室(棟)、研究(棟)、事務(棟)
- 手すり：教室(棟)、研究(棟)、事務(棟)
- 車いすトイレ：教室(棟)、研究(棟)、事務(棟)、図書館
- 障害者用駐車場：教室(棟)、研究(棟)、事務(棟)
- 学内車いす移動：回答していない
- ◎支援制度：なし

～表1-3の通りである。

琉球大学では、過去に障害のある学生が受験・在籍したと報告されており、また授業や設備において配慮がなされていたことが分かる。しかしその内容はまだ不十分であり、またこの1997年の調査以来琉球大学は調査に回答していないものと思われる、大学案内(障害者版)への記載がなく、障害学生に対する配慮は不十分である。

(2) 取り組むべき課題

障害学生数は今後確実に増えると予想されているが、その障害種や障害の程度も様々な学生が多数入学してくることも考えられる。このような状況下で、琉球大学では、中期計画・中期目標(琉球大学, 2003)の一つである「学生への支援に関する目標を達成するための措置」の項目で、「障害のある者の修学環境を整備すること」と掲げている。しかし本学では、障害のある学生の修学実態やニーズについて、十分把握して支援しているとは言い難い状況にある。また、教員にも障害の基礎知識がないため授業等での配慮が十分にされず、学生が不満を持つケースもあり、大学としての全学的かつ恒久的な障害者支援プログラムの構築が急務となっている。

しかし、過去に琉球大学における障害学生に関する研究は行われていないことから、まずは実態把握が必要であると考えられる。

5 本研究の目的

障害学生支援には、設備のバリアフリー、器具や教材などのハード面での支援、また組織や運営、授業などのソフト面での支援など具体的に挙げれば様々な支援が考えられる。しかし、そのような支援を行っていく際に、学生や教職員等の理解・協力なしには成り立たないことを念頭に置く必要がある。そもそも障害のある方々への支援は、理解があつてこそできるものであると考えるからである。障害学生支援を行う際の支援者(学生、教員、事務職員、警備員、障害学生支援担当職員、学長等)は、非常に重要な役割を担い、障害学生にとってはとても心強い存在となるであろう。その中でも特に身近な存在なのは学生や教員、事務

職員であり、授業が中心となる大学生活の中では、教員の障害学生に対する理解や配慮は必要不可欠である。

そこで平成17年度に「障害学生の修学環境保障」プロジェクトチーム（代表：田中敦士）を立ち上げ、琉球大学の全学部教員を対象とした意識調査を行うこととした。琉球大学の教員の障害への認識・理解の実態を把握した上で、障害学生への配慮に関する教員の意識、また大学に求められる支援について現状を明らかにし、今後より良い障害学生の修学支援の在り方について検討することを目的とした。

方法

1 調査対象者

琉球大学の法文学部133名、教育学部112名、医学部271名、理学部83名、工学部98名、農学部62名の全教員（助手以上）計759名を対象とした。

2 調査期間

2006年3月6日に調査票を配布し、同年3月17日を回答期限とした。今回は年度末の多忙期での調査依頼であったため、4月末日の到着分までを分析に加えた。

3 調査内容及び調査手続き

(1) フェイスシート

フェイスシートでは、回答者の基本的属性として所属学部、性別、大学・短大・専門学校等での通算教職年数、年齢を尋ね、これを基に障害児・者への理解度に差があるのかを明らかにすることとした。

(2) 障害児・者観について

生川（1995）は、精神遅滞児（者）に対する健常者の態度を検討するために、“実践的好意（6項目）”、“能力肯定（7項目）”、“統合教育（4項目）”、“地域交流（7項目）”および“理念的好意（4項目）”の5次元28項目で構成された態度尺度得点の有効性を報告している（表2-1）。なおこの28項目については、各次元がいずれも高い信頼性を示しており、Cronbachの α 係数（5次元

中の最小値.663、最大値.867）で信頼性・内的整合性が保障されている。今回はこの5次元28項目の態度尺度得点を理解度得点として用いた。生川（1995）の研究では、高校生から一般成人を対象としていたが、今回の調査では対象者が大学教員と先行研究とは異なるため、尺度の各因子の信頼性指標としてCronbachの α 係数を求めることとした。

5次元28項目（表2-1）については、図2-1のように、「全くそう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思わない」「全くそう思わない」のいずれか1つに○をつける回答方式で行い、回答はそれぞれ順に5、4、3、2、1として得点化した。

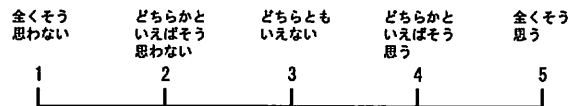


図2-1 回答の記入方法

(3) 障害のある学生について

障害学生に対する大学側からの配慮に関する教員の意識を明らかにするため、実際に障害学生に支援を行っている大学や障害学生支援センター等の資料、河内（2002）による視覚障害学生の学業支援サービスに対する大学生の意識構造を検討した研究等を基に、具体的な支援策を14項目設けた（表2-2）。回答者の障害学生への配慮に対する意識を、前述の図2-1のように「全くそう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらともいえない」「どちらかといえばそう思わない」「全くそう思わない」のいずれか1つに○をつける回答方式で行い、回答はそれぞれ順に5、4、3、2、1として得点化した。

表2-1 障害児・者観についての意識

「障害のある子どもや人々」に関して、現在、あなたが感じていることについてお聞きします。以下の考えに対して、当てはまる番号を1つだけ選んで○をつけてください。

実践的好意	<ul style="list-style-type: none"> ・ 障害のある人々が地域社会で生活することで、地域社会により影響がもたらされる ・ 障害のある人々のためのボランティア活動に参加したい ・ 障害に関するテレビやラジオの放送を、見たり聞いたりしたい ・ 障害のある人々と接したい ・ 障害のある人々が困っていれば助けてあげたい ・ 障害に関する新聞記事などを読みたい
能力肯定	<ul style="list-style-type: none"> ・ 障害のある人々もまわりの人と仲良くする能力がある ・ 障害のある子どもへの教育効果は、かなりある ・ 障害のある子どもも普通の社会生活を送ることができる ・ 障害のある人々も色々な作業をやっている ・ 一般の人の仕事の中には、障害のある人々が入ってできる仕事がたくさんある ・ 障害のある子どもも、指導すれば効果があがる ・ 障害のある人々は、生活に必要な能力は身につけていく
統合教育	<ul style="list-style-type: none"> ・ 普通学級でも、障害のある子どもを十分に教育することができる ・ 障害のある子どもは他の子どもたちと一緒に普通学級で勉強することができる ・ 障害のある子どもも、普通学級へ行ったほうがその子のためにもよい ・ 障害のある子どもが普通学級へ通うことは、周囲にもいい影響がある
地域交流	<ul style="list-style-type: none"> ・ 障害のある子どもも他の子どもたちと一緒に生活することが必要だ ・ 障害のある人々も、どんどん社会参加したほうがよい ・ 障害のある人々に働く場を提供することは大切だ ・ 障害のある人々にとって、同年代の人との交流は必要だ ・ 他の人たちと障害のある人々とがまじわることは大切なことだ ・ 他の子どもたちと障害のある子どもとが一緒に遊ぶことはよいことだ ・ 一般の人は、障害のある人々ともっと接触することが必要だ
理念的好意	<ul style="list-style-type: none"> ・ 障害のある人々のために、地域環境をもっと住みやすいものにしてゆくべきだ ・ 障害のある人々が仕事につけるように国のほうでもっと働きかけるべきだ ・ 障害のある人々の面倒を見るのは、親だけでは限界がある ・ 障害のある人々のことは、社会全体が責任を持つべきだ

出典：精神遅滞児（者）に対する健常者の態度に関する多次元的研究（生川,1995）

表2-2 障害学生への配慮に関する意識

障害のある学生に対して、大学側で次のような配慮をするとしたら、あなたはどのように考えますか。あなたの考えに近い番号にひとつだけ○をつけてください。

<ol style="list-style-type: none"> 1. 障害のある学生も他の学生と同じように大学に入学させる 2. 障害のある学生のための専用の相談窓口を設ける 3. 障害のある学生用の設備や学習向上に役立つサービスを提供する 4. 障害のある学生には、特別にチューター（学習補助者）をつける 5. 障害のある学生に対しては、必要に応じて試験回答の方法を変更する 6. 障害のある学生に対しては、授業の前に講義ノートや資料を提供する 7. 障害のある学生に対しては、授業の後に講義ノートや資料を提供する 8. 障害のある学生のための専用の学習室を設ける 9. 障害のある学生については、必要に応じて試験時間を延長する 10. 障害のある学生には、特別の奨学金を与える 11. 障害のある学生には、必要に応じてレポートなどの提出期限を延長する 12. 障害のある学生には、通院や体調不良等による欠席は公認扱いにする 13. 障害のある学生が履修する場合は、大学から担当教員に事前に通知するようにする 14. 障害学生支援センターを学内に設置し、総合的かつ恒久的な支援体制を構築する

また回答者の中で、実際に障害学生が回答者の 去の障害学生の受講有無について尋ねた。講義を受講したことがあったかを知るために、過

表2-3 障害学生の受講有無

今までに障害のある学生があなたの講義を受講したことがありますか。

1. あった
2. なかった

上記の質問に対して、「1. あった」と回答した者を対象に、その障害学生の障害種を複数回答で回答してもらうことで明らかにすることとした。

表2-4 障害学生の障害種

その学生の障害の種類は何でしたか。次の項目から当てはまるものすべてに○をつけてください。

- | | |
|----------|------------|
| 1. 視覚障害 | 2. 聴覚・言語障害 |
| 3. 死体不自由 | 4. 知的障害 |
| 5. 発達障害 | 6. 精神障害 |
| 7. その他 | 8. わからない |

このほかに、障害者の社会参加について尋ねる質問項目も設定したが、紙面の都合上別途報告することにする。

結果

1 学部別回収率

全体の回収率は759名中の189名で24.9%であった。学部別回収率は以下の通りである。

回収率の最も高い学部は医学部で28.0%、回収率の最も低い学部は法文学部で17.3%であった。

表3-1 学部別回収率 (名)

学部	対象者数	回収数	回収率
法文学部	133	23	17.3%
教育学部	112	25	22.3%
医学部	271	76	28.0%
理学部	83	23	27.7%
工学部	98	26	26.5%
農学部	62	16	25.8%
全体	759	189	24.9%

2 フェイスシート

(1) 回答者の所属学部

回答者の所属学部は、医学部が最も多く40.2%であった。最も少なかったのが農学部で8.5%であった。

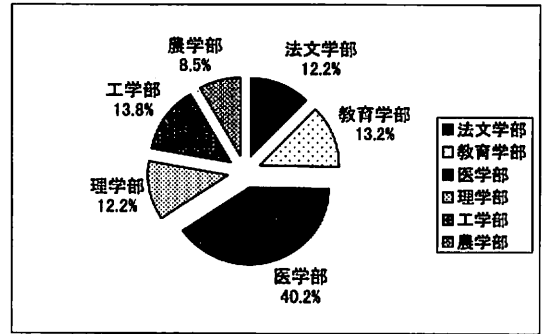


図3-1 回答者の所属学部 (n=189)

(2) 回答者の性別

回答者の性別は、全体で男性が84.2%、女性が15.8%であった。

表3-2 回答者の所属学部別性別 (名)

所属学部	男	女	n
法文学部	16 (70.0%)	7 (30.0%)	23
教育学部	21 (84.0%)	4 (16.0%)	25
医学部	57 (78.1%)	16 (21.9%)	73
理学部	22 (95.7%)	1 (4.3%)	23
工学部	25 (100.0%)	0 (0.0%)	25
農学部	14 (93.3%)	1 (6.6%)	15
計	155 (84.2%)	29 (15.8%)	184

(3) 回答者の大学・短大・専門学校での通算教職年数 (非常勤を含む)

表3-3は、回答者の大学・短大・専門学校での通算教職年数を3つのカテゴリーに分けたものである。0年から10年未満を「若手教員群」、10年以上20年未満を「中堅教員群」、20年以上を「ベテラン教員群」とした。最も多かったのは若手教員群で69名と全体の44.2%であった。

表3-3 大学・短大・専門学校での通算教職年数 (名)

	若手教員群	中堅教員群	ベテラン教員群
通算教職年数	0年から10年未満	10年以上20年未満	20年以上
回答者数	69	45	42

(n=156)

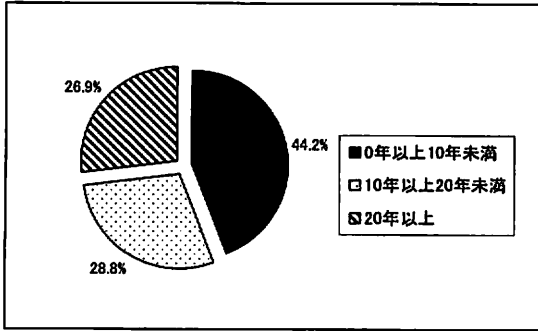


図3-2 大学・短大・専門学校での通算教職年数 (n=156)

表3-4は、回答者の大学・短大・専門学校での通算教職年数の基本統計量を表したものである。通算教職年数の平均は、13.5±9.82年であった。また、最大は40年、最小は1年であった。

表3-4 通算教職年数の基本統計量 (年)

平均値	標準偏差	最小値	最大値	n
13.49	9.82	1	40	156

(4) 回答者の年齢

回答者の年齢は、「40歳以上45歳未満」が最も多く41名で全体の21.7%であった。次いで「35歳以上40歳未満」と「50歳以上55歳未満」が共に35名で18.5%であった。「30歳未満」が最も少なく、2名で全体の1.1%であった。

表3-5は、回答者の年齢を3つのカテゴリーに分けたものである。「30歳未満」「30歳以上35歳未満」「35歳以上40歳未満」を若年層、「40歳以上45歳未満」「45歳以上50歳未満」「50歳以上55歳未満」を中堅層、「55歳以上60歳未満」「60歳以上」をベテラン層とした。最も多かったのは、中堅層で103名と全体の55.7%であった。

表3-5 回答者の年齢

(名)

	若年層	中堅層	ベテラン層
年齢	20代～30代	40代～50代前半	50代後半～60代
回答者数	48	103	34

(n=185)

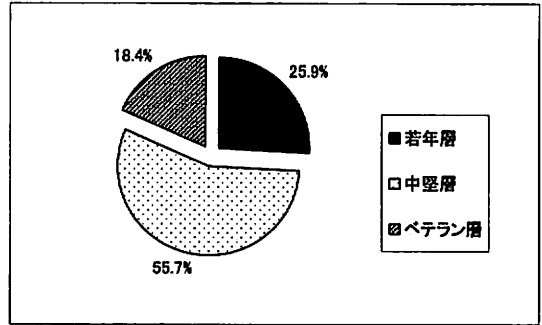


図3-4 回答者の年齢 (n=185)

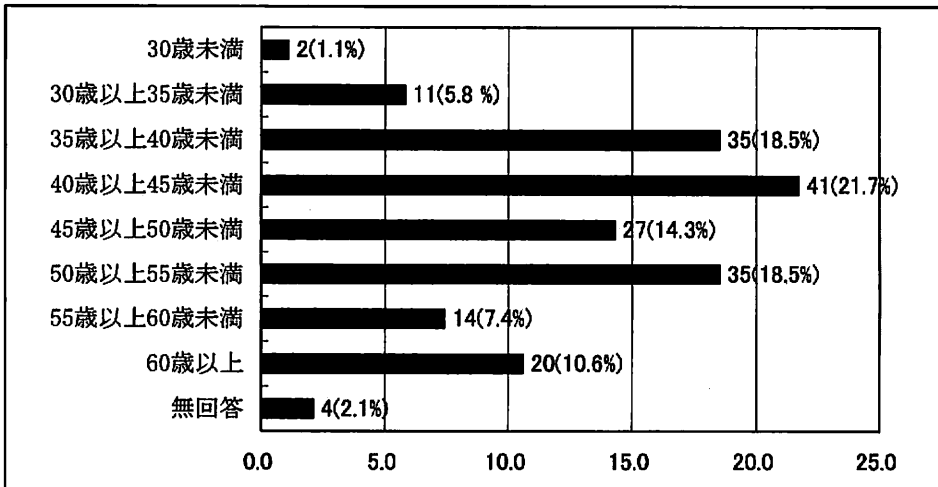


図3-3 回答者の年齢 (n=189)

3 障害児・者観について

(1) 回答者の所属学部別集計結果

1. 障害のある人々が地域社会で生活することで、地域社会により影響がもたらされる

「障害のある人々が地域社会で生活することで、地域社会により影響がもたらされる」という質問の学部別回答結果を表3-6に示した。「どちらかといえばそう思う」が37.5%、「全くそう思う」が47.8%と、全体で8割以上が肯定的に回答した。

表3-6 「障害のある人々が地域社会で生活することで、地域社会により影響がもたらされる」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
どちらかといえばそう思わない	4.3	0.0	2.7	0.0	0.0	0.0	1.6
どちらともいえない	4.3	12.5	12.2	22.7	19.2	6.7	13.0
どちらかといえばそう思う	30.4	20.8	43.2	59.1	26.9	33.3	37.5
全くそう思う	60.9	66.7	41.9	18.2	53.8	60.0	47.8
n (人)	23	24	74	22	26	15	184

2. 障害のある人々もまわりの人と仲良くする能力がある

「障害のある人々もまわりの人と仲良くする能力がある」という質問の学部別回答結果を表3-7に示した。「全くそう思う」が62.9%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が27.4%であり、全体で9割以上が肯定的に回答した。

表3-7 「障害のある人々もまわりの人と仲良くする能力がある」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.3	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
どちらともいえない	8.7	12.0	8.0	13.6	11.5	0.0	9.1
どちらかといえばそう思う	13.0	32.0	30.7	40.9	23.1	13.3	27.4
全くそう思う	78.3	56.0	60.0	45.5	65.4	86.7	62.9
n (人)	23	25	75	22	26	15	186

3. 普通学級でも、障害のある子どもを十分に教育することができる

「普通学級でも、障害のある子どもを十分に教育することができる」という質問の学部別回答結果を表3-8に示した。「どちらともいえない」が35.5%で最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が32.8%であった。「どちらかといえばそう思う」と「全くそう思う」を合わせ「思う」と回答した中では、教育学部が72%と最も高い値を示した。

表3-8 「普通学級でも、障害のある子どもを十分に教育することができる」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	3.9	0.0	3.8	6.7	2.7
どちらかといえばそう思わない	8.7	0.0	10.5	14.3	15.4	13.3	10.2
どちらともいえない	30.4	28.0	44.7	23.8	38.5	20.0	35.5
どちらかといえばそう思う	26.1	44.0	28.9	47.6	26.9	33.3	32.8
全くそう思う	34.8	28.0	11.8	14.3	15.4	26.7	18.8
n (人)	23	25	76	21	26	15	186

4. 障害のある子どもも他の子どもたちと一緒に生活することが必要だ

「障害のある子どもも他の子どもたちと一緒に生活することが必要だ」という質問の学部別回答結果を表3-9に示した。「どちらかといえばそう思う」が42.8%、「全くそう思う」が46.5%と、全体で約9割が肯定的に回答した。

表3-9 「障害のある子どもも他の子どもたちと一緒に生活することが必要だ」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	1.3	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらともいえない	13.0	4.0	13.2	0.0	15.4	6.7	10.2
どちらかといえばそう思う	26.1	28.0	51.3	72.7	30.8	26.7	42.8
全くそう思う	60.9	68.0	34.2	27.3	53.8	66.7	46.5
n (人)	23	25	76	22	26	15	187

5. 障害のある人々のために、地域環境をもっと住みやすいものにしてゆくべきだ

「障害のある人々のために、地域環境をもっと住みやすいものにしてゆくべきだ」という質問の学部別回答結果を表3-10に示した。「全くそう思う」が76.1%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が20.2%であり、全体で9割以上が肯定的に回答した。

表3-10 「障害のある人々のために、地域環境をもっと住みやすいものにしてゆくべきだ」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.3	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
どちらともいえない	0.0	0.0	1.3	4.3	15.4	0.0	3.2
どちらかといえばそう思う	8.7	12.0	27.6	21.7	19.2	13.3	20.2
全くそう思う	91.3	88.0	69.7	73.9	65.4	86.7	76.1
n (人)	23	25	76	23	26	15	188

6. 障害のある人々のためのボランティア活動に参加したい

「障害のある人々のためのボランティア活動に参加したい」という質問の学部別回答結果を表3-11に示した。「どちらともいえない」が41.1%で最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が40.5%であった。

表3-11 「障害のある人々のためのボランティア活動に参加したい」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	8.0	2.7	4.5	0.0	6.7	3.2
どちらかといえばそう思わない	17.4	12.0	10.8	0.0	11.5	0.0	9.7
どちらともいえない	43.5	24.0	40.5	59.1	42.3	40.0	41.1
どちらかといえばそう思う	39.1	40.0	43.2	36.4	34.6	46.7	40.5
全くそう思う	0.0	16.0	2.7	0.0	11.5	6.7	5.4
n (人)	23	25	74	22	26	15	185

7. 障害のある子どもへの教育効果はかなりある

「障害のある子どもへの教育効果はかなりある」という質問の学部別回答結果を表3-12に示した。「どちらかといえばそう思う」が36.1%で最も高く、次いで「全くそう思う」が33.9%であり、全体で7割が肯定的に回答した。「思う」と回答した中では、教育学部が82.6%と最も高い値を示した。

表3-12 「障害のある子どもへの教育効果はかなりある」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	6.7	1.1
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.6
どちらともいえない	26.1	17.4	29.7	47.6	29.2	13.3	28.3
どちらかといえばそう思う	26.1	30.4	39.2	42.9	33.3	40.0	36.1
全くそう思う	47.8	52.2	28.4	9.5	37.5	40.0	33.9
n (人)	23	23	74	21	24	15	180

8. 障害のある子どもは他の子どもたちと一緒に普通学級で勉強することができる

「障害のある子どもは他の子どもたちと一緒に普通学級で勉強することができる」という質問の学部別回答結果を表3-13に示した。「どちらともいえない」が37.2%で最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が36.1%であった。「どちらかといえばそう思わない」と「全くそう思わない」を合わせ全体で10.4%が否定的に回答した。

表3-13 「障害のある子どもは他の子どもたちと一緒に普通学級で勉強することができる」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	4.3	0.0	4.1	0.0	4.0	6.7	3.3
どちらかといえばそう思わない	0.0	4.0	9.5	9.5	8.0	6.7	7.1
どちらともいえない	30.4	28.0	44.6	38.1	36.0	26.7	37.2
どちらかといえばそう思う	30.4	48.0	27.0	38.1	48.0	46.7	36.1
全くそう思う	34.8	20.0	14.9	14.3	4.0	13.3	16.4
n (人)	23	25	74	21	25	15	183

9. 障害のある人々も、どんどん社会参加したほうがよい

「障害のある人々も、どんどん社会参加したほうがよい」という質問の学部別回答結果を表3-14に示した。「全くそう思う」が58.1%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が35.5%であり、全体で9割以上が肯定的に回答した。

表3-14 「障害のある人々も、どんどん社会参加したほうがよい」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
どちらともいえない	4.3	4.0	6.8	4.3	7.7	6.7	5.9
どちらかといえばそう思う	17.4	32.0	47.3	52.2	23.1	6.7	35.5
全くそう思う	78.3	64.0	44.6	43.5	69.2	86.7	58.1
n (人)	23	25	74	23	26	15	186

10. 障害のある人々が仕事につけるように国のほうでもっと働きかけるべきだ

「障害のある人々が仕事につけるように国のほうでもっと働きかけるべきだ」という質問の学部別回答結果を表3-15に示した。「全くそう思う」が64.5%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が28.0%であった。全体で9割以上が肯定的に回答した。

表3-15 「障害のある人々が仕事につけるように国のほうでもっと働きかけるべきだ」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらともいえない	8.7	0.0	8.1	0.0	11.5	6.7	6.5
どちらかといえばそう思う	13.0	12.0	37.8	43.5	26.9	6.7	28.0
全くそう思う	78.3	88.0	51.4	56.5	61.5	86.7	64.5
n (人)	23	25	74	23	26	15	186

11. 障害に関するテレビやラジオの放送を、見たり聞いたりしたい

「障害に関するテレビやラジオの放送を、見たり聞いたりしたい」という質問の学部別回答結果を表3-16に示した。「どちらかといえばそう思う」が49.2%と最も高く、次いで「どちらともいえない」が28.6%であった。「どちらかといえばそう思う」と「全くそう思う」を合わせ「思う」と回答した中では、農学部が86.7%と最も高い値を示し、理学部が36.3%と最も低い値を示した。

表3-16 「障害に関するテレビやラジオの放送を、見たり聞いたりしたい」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	4.3	0.0	0.0	4.5	0.0	0.0	1.1
どちらかといえばそう思わない	8.7	0.0	5.4	4.5	3.8	0.0	4.3
どちらともいえない	13.0	16.0	31.1	54.5	34.6	13.3	28.6
どちらかといえばそう思う	52.2	60.0	44.6	31.8	46.2	80.0	49.2
全くそう思う	21.7	24.0	18.9	4.5	15.4	6.7	16.8
n (人)	23	25	74	22	26	15	185

12. 障害のある子どもも普通の社会生活を送ることができる

「障害のある子どもも普通の社会生活を送ることができる」とう質問の学部別回答結果を表3-17に示した。「どちらかといえばそう思う」が38.0%と最も高く、次いで「全くそう思う」が27.2%であり、全体で6割以上が肯定的に回答した。

表3-17 「障害のある子どもも普通の社会生活を送ることができる」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	3.8	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	4.3	4.0	10.8	4.8	7.7	6.7	7.6
どちらともいえない	17.4	28.0	31.1	28.6	19.2	26.7	26.6
どちらかといえばそう思う	39.1	32.0	35.1	47.6	38.5	46.7	38.0
全くそう思う	39.1	36.0	23.0	19.0	30.8	20.0	27.2
n (人)	23	25	74	21	26	15	184

13. 障害のある子どもも、普通学級へ行ったほうがその子のためにもよい

「障害のある子どもも、普通学級へ行ったほうがその子のためにもよい」という質問の学部別回答結果を表3-18に示した。「どちらともいえない」が42.5%で最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が32.3%であった。「どちらかといえばそう思わない」と「全くそう思わない」を合わせて全体で10.3%が否定的に回答した。

表3-18 「障害のある子どもも、普通学級へ行ったほうがその子のためにもよい」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	4.3	0.0	4.1	0.0	0.0	0.0	2.2
どちらかといえばそう思わない	0.0	4.0	8.1	13.0	7.7	20.0	8.1
どちらともいえない	43.5	52.0	48.6	30.4	38.5	20.0	42.5
どちらかといえばそう思う	21.7	28.0	25.7	47.8	42.3	46.7	32.3
全くそう思う	30.4	16.0	13.5	8.7	11.5	13.3	15.1
n (人)	23	25	74	23	26	15	186

14. 障害のある人々に働く場を提供することは大切だ

「障害のある人々に働く場を提供することは大切だ」という質問の学部別回答結果を表3-19に示した。「全くそう思う」が66.7%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が30.1%であり、全体で9割以上が肯定的に回答した。

表3-19 「障害のある人々に働く場を提供することは大切だ」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
どちらともいえない	0.0	0.0	4.1	0.0	3.8	6.7	2.7
どちらかといえばそう思う	21.7	20.0	39.2	39.1	23.1	13.3	30.1
全くそう思う	78.3	80.0	55.4	60.9	73.1	80.0	66.7
n (人)	23	25	74	23	26	15	186

15. 障害のある人々の面倒を見るのは、親だけでは限界がある

「障害のある人々の面倒を見るのは、親だけでは限界がある」という質問の学部別回答結果を表3-20に示した。「全くそう思う」が73.1%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が24.7%であり、全体で9割以上が肯定的に回答した。「全くそう思う」と回答した中では、法文学部が91.3%、教育学部が92.0%と文系学部が特に高い値を示した。

表3-20 「障害のある人々の面倒を見るのは、親だけでは限界がある」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
どちらともいえない	0.0	0.0	1.4	0.0	7.7	0.0	1.6
どちらかといえばそう思う	8.7	8.0	29.7	39.1	26.9	26.7	24.7
全くそう思う	91.3	92.0	67.6	60.9	65.4	73.3	73.1
n (人)	23	25	74	23	26	15	186

16. 障害のある人々と接したい

「障害のある人々と接したい」という質問の学部別回答結果を表3-21に示した。「どちらともいえない」が37.3%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が34.6%であった。「全くそう思う」と回答した中では教育学部が36.0%と最も高い値を示し、理学部が4.5%と最も低い値を示した。

表3-21 「障害のある人々と接したい」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	4.0	0.0	4.5	0.0	0.0	1.1
どちらかといえばそう思わない	4.3	4.0	10.8	0.0	7.7	0.0	6.5
どちらともいえない	34.8	28.0	36.5	72.7	34.6	13.3	37.3
どちらかといえばそう思う	43.5	28.0	35.1	18.2	30.8	60.0	34.6
全くそう思う	17.4	36.0	17.6	4.5	26.9	26.7	20.5
n (人)	23	25	74	22	26	15	185

17. 障害のある人々も色々な作業をやっている

「障害のある人々も色々な作業をやっている」という質問の学部別回答結果を表3-22に示した。「どちらかといえばそう思う」が最も高く45.1%であった。次に「全くそう思う」が35.2%であり、全体で8割以上が肯定的に回答した。

表3-22 「障害のある人々も色々な作業をやっている」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	2.7	0.0	0.0	6.7	1.6
どちらともいえない	9.1	8.0	20.3	28.6	28.0	6.7	18.1
どちらかといえばそう思う	45.5	44.0	45.9	38.1	40.0	60.0	45.1
全くそう思う	45.5	48.0	31.1	33.3	32.0	26.7	35.2
n (人)	22	25	74	21	25	15	182

18. 障害のある子どもが普通学級へ通うことは、周囲にもいい影響がある

「障害のある子どもが普通学級へ通うことは、周囲にもいい影響がある」という質問の学部別回答結果を表3-23に示した。「どちらかといえばそう思う」が40.9%と最も高く、次いで「全くそう思う」が36.0%であった。全体で7割以上が肯定的に回答したが、約2割は「どちらともいえない」と答え、統合教育への疑問を持つ人が少なくないことが分かった。

表3-23 「障害のある子どもが普通学級へ通うことは、周囲にもいい影響がある」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	4.1	0.0	3.8	6.7	2.7
どちらともいえない	8.7	8.0	27.0	26.1	23.1	6.7	19.9
どちらかといえばそう思う	30.4	28.0	39.2	65.2	42.3	46.7	40.9
全くそう思う	60.9	64.0	28.4	8.7	30.8	40.0	36.0
n (人)	23	25	74	23	26	15	186

19. 障害のある人々にとって、同年代の人との交流は必要だ

「障害のある人々にとって、同年代の人との交流は必要だ」という質問の学部別回答結果を表3-24に示した。「全くそう思う」が59.8%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が33.2%であり、全体で9割以上が肯定的に回答した。

表3-24 「障害のある人々にとって、同年代の人との交流は必要だ」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
どちらともいえない	0.0	0.0	9.7	8.7	11.5	0.0	6.5
どちらかといえばそう思う	26.1	20.0	36.1	60.9	26.9	20.0	33.2
全くそう思う	73.9	80.0	52.8	30.4	61.5	80.0	59.8
n (人)	23	25	72	23	26	15	184

20. 障害のある人々のことは、社会全体が責任を持つべきだ

「障害のある人々のことは、社会全体が責任を持つべきだ」という質問の学部別回答結果を表3-25に示した。「全くそう思う」が58.7%と最も高く、次いで「どちらかというところそう思う」が29.3%であり、全体で約9割が肯定的に回答した。

表3-25 「障害のある人々のことは、社会全体が責任を持つべきだ」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらともいえない	8.7	0.0	18.1	4.3	11.5	6.7	10.9
どちらかといえばそう思う	17.4	16.0	29.2	65.2	23.1	26.7	29.3
全くそう思う	73.9	84.0	50.0	30.4	65.4	66.7	58.7
n (人)	23	25	72	23	26	15	184

21. 障害のある人々が困っていれば助けてあげたい

「障害のある人々が困っていれば助けてあげたい」という質問の学部別回答結果を表3-26に示した。「全くそう思う」が58.2%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が35.3%であり、全体で9割以上が肯定的に回答した。「どちらともいえない」と回答した中では、理学部が17.4%と最も高い値を示した。

表3-26 「障害のある人々が困っていれば助けてあげたい」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
どちらともいえない	4.3	4.0	5.6	17.4	3.8	0.0	6.0
どちらかといえばそう思う	39.1	20.0	36.1	52.2	30.8	33.3	35.3
全くそう思う	56.5	76.0	56.9	30.4	65.4	66.7	58.2
n (人)	23	25	72	23	26	15	184

22. 一般の人の仕事の中には、障害のある人々が入ってできる仕事がたくさんある

「一般の人の仕事の中には、障害のある人々が入ってできる仕事がたくさんある」という質問の学部別回答結果を表3-27に示した。「どちらかといえばそう思う」が42.5%と最も高く、次いで「全くそう思う」が38.1%であった。全体で8割以上が肯定的に回答した。

表3-27 「一般の人の仕事の中には、障害のある人々が入ってできる仕事がたくさんある」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	2.8	0.0	0.0	0.0	1.1
どちらかといえばそう思わない	4.5	0.0	4.2	0.0	3.8	0.0	2.8
どちらともいえない	0.0	12.5	22.2	9.1	15.4	20.0	15.5
どちらかといえばそう思う	40.9	41.7	40.3	63.6	42.3	26.7	42.5
全くそう思う	54.5	45.8	30.6	27.3	38.5	53.3	38.1
n (人)	22	24	72	22	26	15	181

23. 他の人たちと障害のある人々とがまじわることは大切なことだ

「他の人たちと障害のある人々とがまじわることは大切なことだ」という質問の学部別回答結果を表3-28に示した。「全くそう思う」が最も高く、60.9%と6割を超えた。「どちらかといえばそう思う」が32.6%であり、全体で9割以上が肯定的に回答した。

表3-28 「他の人たちと障害のある人々とがまじわることは大切なことだ」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
どちらともいえない	0.0	0.0	5.6	8.7	15.4	6.7	6.0
どちらかといえばそう思う	26.1	12.0	40.3	65.2	26.9	0.0	32.6
全くそう思う	73.9	88.0	52.8	26.1	57.7	93.3	60.9
n (人)	23	25	72	23	26	15	184

24. 障害に関する新聞記事などを読みたい

「障害に関する新聞記事などを読みたい」という質問の学部別回答結果を表3-29に示した。「どちらかといえばそう思う」が41%と最も高く、次いで「どちらともいえない」が31.7%であった。「どちらかといえばそう思う」と「全くそう思う」を合わせて「思う」と回答した中では、教育学部が84.0%と最も高く、理学部が31.8%と最も低い値を示した。

表3-29 「障害に関する新聞記事などを読みたい」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	4.3	0.0	0.0	4.5	3.8	0.0	1.6
どちらかといえばそう思わない	4.3	0.0	6.9	4.5	7.7	0.0	4.9
どちらともいえない	34.8	16.0	33.3	59.1	23.1	20.0	31.7
どちらかといえばそう思う	39.1	56.0	36.1	27.3	46.2	53.3	41.0
全くそう思う	17.4	28.0	23.6	4.5	19.2	26.7	20.8
n (人)	23	25	72	22	26	15	183

25. 障害のある子どもも、指導すれば効果があがる

「障害のある子どもも、指導すれば効果があがる」という質問の学部別回答結果を表3-30に示した。「どちらかといえばそう思う」が43.4%と最も高く、次いで「全くそう思う」が40.7%であり、全体で8割以上が肯定的に回答した。

表3-30 「障害のある子どもも、指導すれば効果がある」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらともいえない	8.7	16.0	18.1	14.3	15.4	6.7	14.8
どちらかといえばそう思う	43.5	40.0	37.5	71.4	46.2	33.3	43.4
全くそう思う	47.8	44.0	41.7	14.3	38.5	60.0	40.7
n (人)	23	25	72	21	26	15	182

26. 他の子どもたちと障害のある子どもと一緒に遊ぶことはよいことだ

「他の子どもたちと障害のある子どもと一緒に遊ぶことはよいことだ」という質問の学部別回答結果を表3-31に示した。「全くそう思う」が56.8%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が32.2%であり、全体で8割以上が肯定的に回答した。法文学部と教育学部では、100%が思うと回答した。

表3-31 「他の子どもたちと障害のある子どもと一緒に遊ぶことはよいことだ」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
どちらともいえない	0.0	0.0	16.7	8.7	16.0	6.7	10.4
どちらかといえばそう思う	21.7	20.0	31.9	65.2	36.0	13.3	32.2
全くそう思う	78.3	80.0	50.0	26.1	48.0	80.0	56.8
n (人)	23	25	72	23	25	15	183

27. 障害のある人々は、生活に必要な能力は身につけていく

「障害のある人々は、生活に必要な能力は身につけていく」という質問の学部別回答結果を表3-32に示した。「どちらかといえばそう思う」が40.3%と最も高く、次いで「全くそう思う」が33.5%であり、7割以上が肯定的に回答した。

表3-32 「障害のある人々は、生活に必要な能力は身につけていく」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.6
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
どちらともいえない	19.0	28.0	31.4	23.8	19.2	15.4	25.6
どちらかといえばそう思う	28.6	28.0	41.4	57.1	46.2	38.5	40.3
全くそう思う	52.4	44.0	25.7	19.0	34.6	46.2	33.5
n (人)	21	25	70	21	26	13	176

28. 一般の人は、障害のある人々ともっと接触することが必要だ

「一般の人は、障害のある人々ともっと接触することが必要だ」という質問の学部別回答結果を表3-33に示した。「全くそう思う」が46.7%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が38.0%であり、全体で8割以上が思うと回答した。法文学部、教育学部、農学部では9割以上が思うと回答した。

表3-33 「一般の人は、障害のある人々ともっと接触することが必要だ」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	4.8	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらともいえない	4.8	8.0	16.7	21.7	23.1	0.0	14.1
どちらかといえばそう思う	39.1	20.0	44.4	52.2	19.2	46.7	38.0
全くそう思う	52.2	72.0	37.5	26.1	57.7	53.3	46.7
n (人)	23	25	72	23	26	15	184

(2) 尺度の各因子の信頼性について

今回使用した生川 (1995) の尺度の各因子の信頼性指標として、Cronbachの α 係数を求めた。各因子における α 値は、「実践的好意 (.844)」、「能力肯定 (.851)」、「統合教育 (.876)」、「地域交流 (.909)」、「理念的好意 (.805)」であった。5つの因子いずれにおいても内的一貫性が高く、生川の尺度は大学教員を対象としても十分な信頼性を有していると考えられた。

(3) 所属学部別理解度得点

回答者の所属学部別に5因子の理解度得点について分析した。6学部に関し、5因子の理解度得点の平均値、標準偏差を算出し (表3-34)、さらに学部を要因とする一要因の分散分析を行った結果、「実践的好意」($F=2.39, p<0.05$)、「統合教育」($F=2.78, p<0.05$)、「地域交流」($F=3.22, p<0.01$)、「理念的好意」($F=3.01, p<0.05$)の4つの因子で主効果に有意な差が認められた (表3-35)。「能力肯定」においては、主効果に有意な差は認められなかった。

表3-34 各因子の所属学部別平均値及び標準偏差

所属学部	n	実践的好意	能力肯定	統合教育	地域交流	理念的好意
法文学部	23	23.35 (3.73)	29.83 (3.93)	16.04 (3.34)	32.65 (2.53)	19.17 (1.27)
教育学部	25	24.60 (3.94)	29.44 (3.63)	15.96 (2.51)	33.16 (2.56)	19.52 (1.01)
医学部	76	22.34 (5.01)	27.04 (6.08)	13.71 (3.66)	29.13 (6.46)	17.42 (3.24)
理学部	23	20.30 (4.70)	25.87 (7.71)	13.91 (3.23)	29.70 (2.57)	18.13 (1.52)
工学部	26	23.62 (3.84)	28.58 (4.13)	14.19 (2.77)	31.12 (4.08)	18.12 (2.12)
農学部	16	23.25 (6.74)	27.56 (8.29)	13.94 (5.22)	31.00 (8.78)	17.81 (4.93)
合計	189	22.77 (4.82)	27.81 (5.88)	14.40 (3.57)	30.59 (5.46)	18.13 (2.81)

※ () 内は標準偏差

表3-35 学部を要因とする一要因の分散分析結果

		自由度	F 値	有意確率	
“実践的好意”	グループ間	5	2.390	0.040	*
	グループ内	183			
“統合教育”	グループ間	5	2.775	0.019	*
	グループ内	183			
“地域交流”	グループ間	5	3.222	0.008	**
	グループ内	183			
“理念的好意”	グループ間	5	3.011	0.012	*
	グループ内	183			

** p<0.01,* p<0.05

(4) 通算教職年数別理解度得点

回答者の通算教職年数別に5因子の理解度得点について分析した。回答者の通算教職年数をそれぞれ、0から10年未満の「若手教員群」、10年以上20年未満の「中堅教員群」、20年以上の「ベテラン教員群」とし、この3つのカテゴリーに関し、5因子の理解度得点の平均値、標準偏差を算出した(表3-36)。さらに通算教職年数を要因とする一要因の分散分析を行った結果、“統合教育”(F=3.31, p<0.05)で主効果に有意な差が認められた(表3-37)。“実践的好意”、“能力肯定”、“地域交流”、“理念的好意”においては、主効果に有意な差は認められなかった。さらに多重比較を行った結果、“統合教育”で若手教員群と中堅教員群の間に有意な差が認められた。

表3-36 各因子の教職年数別平均値及び標準偏差

教職年数	n	実践的好意	能力肯定	統合教育	地域交流	理念的好意
若手教員群	69	23.16 (4.13)	27.67 (5.30)	13.88 (3.58)	30.74 (4.60)	18.13 (2.27)
中堅教員群	45	23.22 (4.10)	29.42 (4.16)	15.58 (3.15)	31.49 (4.31)	18.56 (2.02)
ベテラン教員群	42	23.05 (4.39)	28.29 (5.33)	14.69 (3.53)	30.74 (5.54)	18.64 (2.78)
合計	156	23.15 (4.16)	28.34 (5.03)	14.59 (3.50)	30.96 (4.78)	18.39 (2.35)

※ () 内は標準偏差

表3-37 教職年数を要因とする一要因の分散分析結果

		自由度	F 値	有意確率	
“統合教育”	グループ間	2	3.31	0.039	*
	グループ内	153			

** p<0.01,* p<0.05

(5) 年齢別理解度得点

回答者の年齢別に5因子の理解度得点について分析した。回答者の年齢を、20代~30代の「若年層」、40代~50代前半の「中堅層」、50代後半~60代の「ベテラン層」とし、この3つのカテゴリーに関し、5因子の理解度得点の平均値、標準偏差を算出した(表3-38)。さらに年齢を要因とする一要因の分散分析を行った結果、“地域交流”(F=3.80, p<0.05)で主効果に有意な差が認められた(表3-39)。“実践的好意”、“能力肯定”、“統合教育”、“理念的好意”においては、主効果に有意な差は認められなかった。さらに多重比較を行った結果、“地域交流”で若年層とベテラン層の間に有意な差が認められた。

表3-38 各因子の年齢別平均値及び標準偏差

年齢	n	実践的好意	能力肯定	統合教育	地域交流	理念的好意
若年層	48	23.69 (3.47)	29.17 (3.80)	15.21 (3.35)	32.27 (3.14)	18.77 (1.59)
中堅層	103	22.69 (5.01)	27.66 (6.31)	14.23 (3.54)	30.31 (5.45)	18.10 (2.83)
ベテラン層	34	21.91 (5.86)	26.38 (6.77)	13.97 (3.88)	29.06 (7.50)	17.32 (3.91)
合計	185	22.81 (4.85)	27.82 (5.90)	14.44 (3.57)	30.59 (5.50)	18.13 (2.84)

※ () 内は標準偏差

表3-39 年齢を要因とする一要因の分散分析結果

	自由度	F値	有意確率
“地域交流” グループ間	2	3.80	0.024 *
グループ内	182		

** p<0.01,* p<0.05

4 障害のある学生について

(1) 回答者の学部別集計結果

1. 障害のある学生も他の学生と同じように大学に入学させる

「障害のある学生も他の学生と同じように大学に入学させる」という質問の学部別回答結果を表3-40に示した。「全くそう思う」が46.5%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が33.5%であり、全体で8割以上が肯定的に回答した。

表3-40 「障害のある学生も他の学生と同じように大学に入学させる」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	4.0	1.4	0.0	0.0	0.0	1.1
どちらかといえばそう思わない	4.5	0.0	1.4	0.0	3.8	6.7	2.2
どちらともいえない	13.6	0.0	18.9	26.1	26.9	6.7	16.8
どちらかといえばそう思う	9.1	32.0	37.8	47.8	26.9	40.0	33.5
全くそう思う	72.7	64.0	40.5	26.1	42.3	46.7	46.5
n (人)	22	25	74	23	26	15	185

2. 障害のある学生のための専用の相談窓口を設ける

「障害のある学生のための専用の相談窓口を設ける」という質問の学部別回答結果を表3-41に示した。「全くそう思う」が最も高く50.3%、次いで「どちらかといえばそう思う」が31.9%であり、全体で8割以上が肯定的に回答した。「全くそう思う」と回答した中では、教育学部が92.0%と最も高く、理学部が34.8%と最も低い値を示した。

表3-41 「障害のある学生のための専用の相談窓口を設ける」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	2.7	0.0	0.0	0.0	1.1
どちらかといえばそう思わない	4.5	0.0	8.1	4.3	0.0	0.0	4.3
どちらともいえない	13.6	4.0	14.9	4.3	19.2	13.3	12.4
どちらかといえばそう思う	18.2	4.0	37.8	56.5	34.6	26.7	31.9
全くそう思う	63.6	92.0	36.5	34.8	46.2	60.0	50.3
n (人)	22	25	74	23	26	15	185

3. 障害のある学生用の設備や学習向上に役立つサービスを提供する

「障害のある学生用の設備や学習向上に役立つサービスを提供する」という質問の学部別回答結果を表3-42に示した。「全くそう思う」が51.6%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が38.2%であり、全体で約9割が肯定的に回答した。

表3-42 「障害のある学生用の設備や学習向上に役立つサービスを提供する」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	4.3	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらともいえない	0.0	12.0	10.8	4.3	15.4	6.7	9.1
どちらかといえばそう思う	26.1	12.0	45.9	56.5	42.3	26.7	38.2
全くそう思う	69.9	76.0	41.9	39.1	42.3	66.7	51.6
n (人)	23	25	74	23	26	15	186

4. 障害のある学生には、特別にチューター（学習補助者）をつける

「障害のある学生には、特別にチューター（学習補助者）をつける」という質問の学部別回答結果を表3-43に示した。「全くそう思う」が38.2%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が33.3%であり、全体で7割以上が肯定的に回答した。

表3-43 「障害のある学生には、特別にチューター（学習補助者）をつける」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	4.0	5.4	0.0	3.8	0.0	3.2
どちらかといえばそう思わない	4.3	0.0	5.4	4.3	3.8	0.0	3.8
どちらともいえない	4.3	4.0	31.1	39.1	15.4	13.3	21.5
どちらかといえばそう思う	26.1	28.0	35.1	26.1	46.2	33.3	33.3
全くそう思う	65.2	64.0	23.0	30.4	30.8	53.3	38.2
n (人)	23	25	74	23	26	15	186

5. 障害のある学生に対しては、必要に応じて試験回答の方法を変更する（口頭や点字等）

「障害のある学生に対しては、必要に応じて試験回答の方法を変更する（口頭や点字等）」という質問の学部別回答結果を表3-44に示した。「全くそう思う」が54.3%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が33.3%であり、全体で8割以上が肯定的に回答した。法文学部と教育学部では、100%が思うと回答した。

表3-44 「障害のある学生に対しては、必要に応じて試験回答の方法を変更する（口頭や点字等）」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	0.0	0.0	0.5
どちらかといえばそう思わない	0.0	0.0	1.4	0.0	3.8	6.7	1.6
どちらともいえない	0.0	0.0	9.5	21.7	26.9	0.0	10.2
どちらかといえばそう思う	26.1	20.0	39.2	34.8	34.6	33.3	33.3
全くそう思う	73.9	80.0	48.6	43.5	34.6	60.0	54.3
n (人)	23	25	74	23	26	15	186

6. 障害のある学生に対しては、授業の前に講義ノートや資料（電子ファイル等）を提供する

「障害のある学生に対しては、授業の前に講義ノートや資料（電子ファイル等）を提供する」という質問の学部別回答結果を表3-45に示した。「どちらかといえばそう思う」が32.8%と最も高く、次いで「どちらともいえない」が32.3%と3割以上が疑問的に回答した。「全くそう思う」と回答した中では教育学部が40.0%と最も高く、理学部が4.3%と最も低い値を示した。また1割以上が否定的に回答した。

表3-45 「障害のある学生に対しては、授業の前に講義ノートや資料（電子ファイル等）を提供する」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	8.0	5.4	0.0	3.8	0.0	3.8
どちらかといえばそう思わない	8.7	4.0	5.4	13.0	3.8	6.7	6.5
どちらともいえない	34.8	16.0	36.5	52.2	26.9	13.3	32.3
どちらかといえばそう思う	30.4	32.0	29.7	30.4	38.5	46.7	32.8
全くそう思う	26.1	40.0	23.0	4.3	26.9	33.3	24.7
n (人)	23	25	74	23	26	15	186

7. 障害のある学生に対しては、授業の後に講義ノートや資料（電子ファイル等）を提供する

「障害のある学生に対しては、授業の後に講義ノートや資料（電子ファイル等）を提供する」という質問の学部別回答結果を表3-46に示した。「どちらかといえばそう思う」が30.8%と最も高く、次いで「どちらともいえない」と「全くそう思う」が30.2%であり、3割以上が疑問的に回答し、全体で6割以上が肯定的に回答した。「思う」と回答した中では農学部が80.0%と最も高い値を示した。

表3-46 「障害のある学生に対しては、授業の後に講義ノートや資料（電子ファイル等）を提供する」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	5.4	0.0	4.0	0.0	2.7
どちらかといえばそう思わない	4.5	4.2	5.4	9.1	8.0	6.7	6.0
どちらともいえない	27.3	25.0	29.7	54.5	28.0	13.3	30.2
どちらかといえばそう思う	22.7	25.0	32.4	36.4	36.0	26.7	30.8
全くそう思う	45.5	45.8	27.0	0.0	24.0	53.3	30.2
n (人)	22	24	74	22	25	15	182

8. 障害のある学生のための専用の学習室を設ける

「障害のある学生のための専用の学習室を設ける」という質問の学部別回答結果を表3-47に示した。「どちらともいえない」が40.9%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が27.4%であった。「全くそう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合わせ、全体で12.9%が否定的に回答した。

表3-47 「障害のある学生のための専用の学習室を設ける」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	4.1	0.0	7.7	0.0	2.7
どちらかといえばそう思わない	13.0	4.0	14.9	4.3	7.7	6.7	10.2
どちらともいえない	30.4	36.0	37.8	52.2	57.7	33.3	40.9
どちらかといえばそう思う	26.1	12.0	33.8	26.1	19.2	40.0	27.4
全くそう思う	30.4	48.0	9.5	17.4	7.7	20.0	18.8
n (人)	23	25	74	23	26	15	186

9. 障害のある学生については、必要に応じて試験時間を延長する

「障害のある学生については、必要に応じて試験時間を延長する」という質問の学部別回答結果を表3-48に示した。「どちらかといえばそう思う」が35.5%と最も高く、次いで「全くそう思う」が29.0%であり、全体で6割以上が肯定的に回答した。

表3-48 「障害のある学生については、必要に応じて試験時間を延長する」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	4.0	5.4	0.0	7.7	0.0	3.8
どちらかといえばそう思わない	13.0	0.0	6.8	4.3	7.7	6.7	6.5
どちらともいえない	17.4	12.0	31.1	43.5	23.1	6.7	25.3
どちらかといえばそう思う	34.8	40.0	33.8	26.1	30.8	60.0	35.5
全くそう思う	34.8	44.0	23.0	26.1	30.8	26.7	29.0
n (人)	23	25	74	23	26	15	186

10. 障害のある学生には、特別の奨学金を与える

「障害のある学生には、特別の奨学金を与える」という質問の学部別回答結果を表3-49に示した。「どちらともいえない」が42.8%で最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が28.1%であった。「全くそう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合わせて、全体で11.3%が否定的に回答した。

表3-49 「障害のある学生には、特別の奨学金を与える」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	4.5	12.0	5.4	0.0	7.7	0.0	5.4
どちらかといえばそう思わない	4.5	0.0	6.8	8.7	11.5	0.0	5.9
どちらともいえない	45.5	16.0	41.9	65.2	53.8	33.3	42.8
どちらかといえばそう思う	27.3	32.0	31.1	17.4	19.2	40.0	28.1
全くそう思う	18.2	40.0	14.9	8.7	7.7	26.7	17.8
n (人)	22	25	74	23	26	15	185

11. 障害のある学生には、必要に応じてレポートなどの提出期限を延長する

「障害のある学生には、必要に応じてレポートなどの提出期限を延長する」という質問の学部別回答結果を表3-50に示した。「どちらかといえばそう思う」が36.9%と最も高く、次いで「どちらともいえない」が28.3%であった。「全くそう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合わせ、全体で18.7%が否定的に回答した。

表3-50 「障害のある学生には、必要に応じてレポートなどの提出期限を延長する」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	4.3	4.0	7.9	4.5	7.7	6.7	6.4
どちらかといえばそう思わない	8.7	8.0	14.5	18.2	11.5	6.7	12.3
どちらともいえない	26.1	20.0	32.9	31.8	26.9	20.0	28.3
どちらかといえばそう思う	39.1	44.0	34.2	31.8	34.6	46.7	36.9
全くそう思う	21.7	24.0	10.5	13.6	19.2	20.0	16.0
n (人)	23	25	76	22	26	15	187

12. 障害のある学生には、通院や体調不良等による授業の欠席は公認扱いにする

「障害のある学生には、通院や体調不良等による授業の欠席は公認扱いにする」という質問の学部別回答結果を表3-51に示した。「どちらかといえばそう思う」が34.2%と最も高く、次いで「どちらともいえない」が29.4%であった。「全くそう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合わせ、全体で13.4%が否定的に回答した。

表3-51 「障害のある学生には、通院や体調不良等による授業の欠席は公認扱いにする」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	4.3	4.0	2.6	4.5	11.5	6.7	4.8
どちらかといえばそう思わない	13.0	12.0	10.5	4.5	0.0	6.7	8.6
どちらともいえない	26.1	20.0	31.6	45.5	19.2	33.3	29.4
どちらかといえばそう思う	26.1	32.0	40.8	22.7	34.6	33.3	34.2
全くそう思う	30.4	32.0	14.5	22.7	34.6	20.0	23.0
n (人)	23	25	76	22	26	15	187

13. 障害のある学生が履修する場合は、大学から担当教員に事前に通知するようにする

「障害のある学生が履修する場合は、大学から担当教員に事前に通知するようにする」という質問の学部別回答結果を表3-52に示した。「全くそう思う」が54.8%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が37.2%であり、全体で9割以上が肯定的に回答した。理学部と農学部では100%が思うと回答した。

表3-52 「障害のある学生が履修する場合は、大学から担当教員に事前に通知するようにする」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.3	0.0	3.8	0.0	1.1
どちらかといえばそう思わない	4.3	0.0	2.6	0.0	0.0	0.0	1.6
どちらともいえない	0.0	4.0	9.2	0.0	7.7	0.0	5.3
どちらかといえばそう思う	34.8	12.0	46.1	39.1	34.6	40.0	37.2
全くそう思う	60.9	84.0	40.8	60.9	53.8	60.0	54.8
n (人)	23	25	76	23	26	15	188

14. 障害学生支援センターを学内に設置し、総合的かつ恒久的な支援体制を構築する

「障害学生支援センターを学内に設置し、総合的かつ恒久的な支援体制を構築する」という質問の学部別回答結果を表3-53に示した。「全くそう思う」が44.7%と最も高く、次いで「どちらかといえばそう思う」が33.0%であり、全体で7割以上が肯定的に回答した。「思う」と回答した中では、教育学部が96.0%と最も高い値を示し、工学部が57.7%と最も低い値を示した。

表3-53 「障害学生支援センターを学内に設置し、総合的かつ恒久的な支援体制を構築する」の学部別回答結果 (%)

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
全くそう思わない	0.0	0.0	1.3	0.0	3.8	0.0	1.1
どちらかといえばそう思わない	4.3	0.0	5.3	0.0	3.8	0.0	3.2
どちらともいえない	4.3	4.0	17.1	34.8	34.6	13.3	18.1
どちらかといえばそう思う	26.1	8.0	39.5	43.5	30.8	40.0	33.0
全くそう思う	65.2	88.0	36.8	21.7	26.9	46.7	44.7
n (人)	23	25	76	23	26	15	188

15. 障害学生の受講有無について

「今までに障害のある学生があなたの講義を受講したことがありましたか」という質問についての回答結果を以下に示した。全体で7割以上が「なかった」と回答した。学部別に見ると、「あった」と答えた中では、教育学部が48.0%、法文学部が47.8%と高い値を示した。

表3-54 学部別障害学生の受講有無 (名(%))

	あった	なかった	n
法文学部	11 (47.8)	12 (52.2)	23
教育学部	12 (48.0)	13 (52.0)	25
医学部	7 (9.5)	67 (90.5)	74
理学部	7 (30.4)	16 (69.6)	23
工学部	8 (33.3)	16 (66.7)	24
農学部	2 (13.3)	13 (86.7)	15
全体	47 (25.5)	137 (74.5)	184

16. 障害学生の障害の種類

今までに障害学生が講義を受講したことが「あった」と回答した者に、「その学生の障害の種類は何か」と質問した結果、聴覚・言語障害と肢体不自由がそれぞれ17名(36.2%)で最も高い値を示した。次いで精神障害が13名(27.7%)、視覚障害が9名(19.1%)であった。

表3-55 障害学生の障害の種類 (名(%))

	法文学部	教育学部	医学部	理学部	工学部	農学部	全体
視覚障害	2 (18.2)	3 (25.0)	0 (0.0)	3 (42.9)	0 (0.0)	1 (50.0)	9 (19.1)
聴覚・言語障害	5 (45.5)	5 (41.7)	0 (0.0)	3 (42.9)	4 (50.0)	0 (0.0)	17 (36.2)
肢体不自由	4 (36.4)	4 (33.3)	6 (85.7)	0 (0.0)	2 (25.0)	1 (50.0)	17 (36.2)
知的障害	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (25.0)	0 (0.0)	2 (4.3)
発達障害	0 (0.0)	1 (8.3)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (12.5)	0 (0.0)	2 (4.3)
精神障害	3 (27.3)	4 (33.3)	2 (28.6)	1 (14.3)	3 (37.5)	0 (0.0)	13 (27.7)
その他	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (12.5)	0 (0.0)	1 (2.1)
わからない	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
n	11	12	7	7	8	2	47

(複数回答)

(2) 因子分析結果

障害学生への配慮に関する意識14項目(表3-40~表3-53)に関し、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。因子分析により3因子を抽出したところ、その固有値はいずれも1以上であった。よって3因子構造が妥当であると考えられた。

6項目から成る第1因子を、どの障害種にも共通する配慮・支援内容として「全障害学生共通配慮因子」、5項目から成る第2因子を、ある特定の障害に応じた配慮・支援内容として「特定障害学生個別配慮因子」、3項目から成る第3因子を、障害の有無に関わらず全学生に共通する配慮・支援内容として「全学生共通配慮因子」と名付け、障害学生への配慮に関する意識尺度とした。

表3-56 障害学生への配慮に関する意識の因子分析結果（プロマックス回転後の因子パターン）

項目	全障害学生 共通配慮	特定障害学 生個別配慮	全学生共通 配慮
3.障害のある学生用の設備や学習向上に役立つサービスを提供する	0.995	-0.125	-0.004
1.障害のある学生も他の学生と同じように大学に入学させる	0.760	-0.072	-0.082
14.障害学生支援センターを学内に設置し、総合的かつ恒久的な支援体制を構築する	0.685	0.107	-0.045
5.障害のある学生に対しては、必要に応じて試験回答の方法を変更する	0.656	0.001	0.137
2.障害のある学生のための専用の相談窓口を設ける	0.568	0.126	0.009
13.障害のある学生が履修する場合は、大学から担当教員に事前に通知するようにする	0.428	0.194	-0.063
11.障害のある学生には、必要に応じてレポートなどの提出期限を延長する	-0.089	1.003	-0.118
9.障害のある学生については、必要に応じて試験時間を延長する	0.007	0.754	0.098
12.障害のある学生には、通院や体調不良等による欠席は公認扱いにする	0.079	0.646	-0.091
10.障害のある学生には、特別の奨学金を与える	0.061	0.548	0.138
8.障害のある学生のための専用の学習室を設ける	0.057	0.448	0.240
6.障害のある学生に対しては、授業の前に講義ノートや資料を提供する	-0.071	-0.006	0.951
7.障害のある学生に対しては、授業の後に講義ノートや資料を提供する	-0.011	-0.043	0.909
4.障害のある学生には、特別にチューター(学習補助者)をつける	0.336	0.165	0.353

表3-57 プロマックス回転後の因子間相関

因子	全障害学生共通配慮	特定障害学生配慮	全学生配慮
全障害学生共通配慮	1.000	0.567	0.651
特定障害学生配慮	0.567	1.000	0.647
全学生配慮	0.651	0.647	1.000

(3) 尺度の各因子の信頼性について

尺度の各因子の信頼性指標として、Cronbachの α 係数を求めた。各因子における α 値は、“全障害学生共通配慮 (.848)”、“特定障害学生個別配慮 (.850)”、“全学生共通配慮 (.846)”であった。3つの因子いずれにおいても内的一貫性が高く、信頼性を有していると言える。

(4) 所属学部別意識度得点

回答者の所属学部別に3因子の意識度得点について分析した。6学部に関し、3因子の意識度得点の平均値、標準偏差を算出し(表3-58)、さらに学部を要因とする一要因の分散分析を行った結果、“全障害学生共通配慮”(F=3.62, p<0.01)、“全学生共通配慮”(F=2.48, p<0.05)、の2つの因子で主効果に有意な差が認められた(表3-59)。“特定障害学生個別配慮”においては、主効果に有意な差は認められなかった。さらに多重比較を行った結果、“全障害学生共通配慮”で教育学部と医学部、また教育学部と工学部の間に有意な差が認められた。“全学生共通配慮”に関しても、主効果に有意な差が認められた。

表3-58 各因子の所属学部別平均値及び標準偏差

所属学部	n	全障害学生共通配慮	特定障害学生個別配慮	全学生共通配慮
法文学部	23	26.91 (4.37)	18.30 (4.44)	12.17 (2.15)
教育学部	25	28.48 (2.38)	19.64 (4.26)	12.36 (2.56)
医学部	76	24.55 (4.90)	16.87 (4.22)	10.66 (3.37)
理学部	23	25.26 (2.72)	17.13 (3.61)	10.22 (1.68)
工学部	26	24.69 (3.23)	17.15 (4.90)	11.31 (2.85)
農学部	16	25.06 (7.43)	17.75 (5.66)	11.94 (3.94)
合計	189	25.51 (4.60)	17.56 (4.46)	11.21 (3.02)

※ () 内は標準偏差

表3-59 学部を要因とする一要因の分散分析結果

		自由度	F値	有意確率	
“全障害学生共通配慮”	グループ間	5	3.622	0.004	**
	グループ内	183			
“全学生共通配慮”	グループ間	5	2.480	0.034	*
	グループ内	183			

** p<0.01, * p<0.05

(5) 通算教職年数別意識度得点

回答者の通算教職年数をそれぞれ、0から10年未満の「若手教員群」、10年以上20年未満の「中堅教員群」、20年以上の「ベテラン教員群」とし、通算教職年数を要因とする一要因の分散分析を行った結果、主効果に有意な差は認められなかった。

(6) 年齢別意識度得点

回答者の年齢を、20代～30代の「若年層」、40代～50代前半の「中堅層」、50代後半～60代の「ベテラン層」とし、この3つのカテゴリーに関し、年齢を要因とする一要因の分散分析を行った結果、主効果に有意な差は認められなかった。

考察

1 回収率

今回の調査の全体の回収率は、759名中の189名で24.9%と低い結果となった。このことから、教員の中の4人に1人は「障害」や「障害のある人」について関心がある、若しくは考えようとする姿勢が見られ、残りの3人は「障害」または「障害のある人」について無関心、若しくはこの問題に背を向けていると考えることもできる。しかし、年度末の多忙期に調査依頼をせざるを得なかったことから、回収率の低さで意識を判断するのは避

けたほうが良いと思われる。

2 障害児・者に対する理解度得点

(1) 所属学部別理解度得点

所属学部別理解度得点の結果から、5つの因子の理解度得点の平均値はいずれもやや高く、全体的に障害児・者に対して肯定的に思っていた。各因子の学部別平均値を見ると、「教育学部」と「法文学部」が他の学部よりもやや高いことが分かる。所属学部を要因とした一要因の分散分析の結果、所属学部間においては理解度に差があり、また多重比較の結果から“実践的好意”、“地域交流”、“理念的好意”においては、「教育学部」が「理学部」や「医学部」に比べてより理解度が高いことが明らかとなった。このことから、障害学生の修学支援を行っていく上で教育学部や法文学部が比較的良好的的環境にあると言え、積極的に障害学生支援に取り組んで模範となるべき支援モデルを構築し、全学的にノウハウを浸透させていくことが必要ではなからうか。

(2) 通算教職年数別理解度得点

通算教職年数別理解度得点の結果から、どの教職年数群においても各因子の理解度得点の平均値は高く、全体的に障害児・者に対し

て肯定的に思っていた。通算教職年数を要因とした一要因の分散分析の結果から、「統合教育」においては理解度に差があり、さらに多重比較の結果、「統合教育」において「中堅教員群」が「若手教員群」よりも統合教育についてより肯定的に思っていることが明らかとなった。このことは、「統合教育」に関して「中堅教員群」が最も肯定的に思っており、年齢も比較的若いであろうと予想される「若手教員群」が「統合教育」に関して「どちらともいえない」というような若干の戸惑いを示していることが伺える。各因子の教職年数別平均値を見ても「中堅教員群」が他の2つの群よりやや高く、障害学生支援を行っていく上で、「中堅教員群」が最も理解がある支援者として信頼できる立場にあると推測できる。したがって、本学で10年以上の教職年数を有する中堅教員が、障害学生支援の主導的な立場に就くことがより望ましいであろう。

(3) 年齢別理解度得点

年齢別理解度得点の結果から、どの年齢層においても各因子の理解度得点の平均値は高く、全体的に障害児・者に対して肯定的に思っていた。年齢別の平均値を見ると、どの因子においても「若年層」、「中堅層」、「ベテラン層」の順に平均値が高いことが分かる。また、年齢を要因とした一要因の分散分析の結果から、「地域交流」においては理解度に差があり、多重比較の結果から、「地域交流」において「若年層」が「ベテラン層」に比べてより理解度が高いことが明らかとなった。このことは、「若年層」が「ベテラン層」よりも障害児・者に対してより肯定的に思っており、年齢が若いほど理解度も高くなる傾向があることが伺える。障害学生支援を行っていく上では、20～30代の教員が最も理解がある支援者として信頼できる立場にあると推測できる。

3 障害のある学生への配慮に関する意識度得点

所属学部別意識度得点の結果から、3つの因子の意識度得点の平均値はいずれもやや高く、障害のある学生への配慮に関してやや肯定的に思っ

いた。またその中でも「教育学部」と「法文学部」が3つのどの因子においても他の学部よりも平均値がやや高い。学部を要因とした一要因の分散分析の結果から、「全障害学生共通配慮」と「全学生共通配慮」においては意識度に差があり、また多重比較の結果、「全障害学生配慮」において「教育学部」が「医学部」と「工学部」に比べより意識が高いことが明らかとなった。各因子の所属学部別平均値を見ても3つの因子で「教育学部」が最も高い値を示している。以上から、障害学生支援を行っていく上で「教育学部」と「法文学部」が比較的理解の得られやすい人的環境にあると推測される。

4 全体的考察

本調査では、琉球大学の教員の障害への認識・理解の実態を把握した上で、障害学生への配慮に関する教員の意識、また大学に求められる支援について現状を明らかにし、今後より良い障害学生の修学支援の在り方について検討することを目的とした。

今回の調査で、大学教員の障害への認識・理解の実態としては非常に良い結果が示された。全体的に障害児・者に対して理解があり、肯定的に思っていることが明らかとなった。学部間では、「教育学部」や「法文学部」が特に高い理解度を示していた。また回収率の面からすると、「医学部」においても積極的に考えようとする姿勢が示唆された。この背景には、教育や福祉、人体に関わる医療関係等の「障害のある人」との接点がある分野を専門とした教員が多いことが考えられる。今後障害学生の修学支援が進められるにあたって期待できる結果となった。

しかし、今回の調査の回収率の低さからすると、一概に「意識は高い」と結論づけることはできない。多忙期であるにもかかわらず回答された熱意ある教員の結果であって、大学全体の真の実態が反映されているとは言い切れない。今後障害学生の修学支援を進めていくには、大学教員の更なる意識の啓発をしていかななくてはならない。大学は障害学生の実態を把握した上で、教員の意識を高めるような大学側からの啓蒙を行うべきであると考える。また、教員一人ひとりには、障害学生の

意見や要望に親身になって耳を傾け、理解しようとする姿勢を持つことや、障害学生だけでなくすべての学生にわかりやすい授業の提供が求められる。今後、障害のある学生への意識を高め、教員の理解・協力を得た上での具体的な支援体制の構築が重要な課題となるであろう。

付 記

本研究を進めるにあたり、ご協力をいただきました琉球大学の法文学部、教育学部、医学部、理学部、工学部、農学部、全教員の皆様に心からお礼申し上げます。また、「障害学生の修学環境保障」プロジェクトチームに参画くださった法文学部教授の高嶺豊先生、保健管理センターの古川卓先生に深く感謝申し上げます。

文 献

- 旭洋一郎 2004 「ともに学ぶキャンパス作り」の段階を迎えた障害学生支援 大学と学生, 8, 12-16
- 生川善雄 1995 精神遅滞児(者)に対する健常者の態度に関する多次元的研究—態度と接触経験、性、知識との関係— 特殊教育学研究 32 (4), 11-19
- 大泉溥 2003 大学での障害学生支援のコーディネーター 51 (12), 52-57
- 大泉溥 2004 障害学生支援の視点と課題 大学と学生, 8, 33-37
- 河内清彦 2002 視覚障害学生の学業支援サービスに対する大学生の意識構造—自己効力感、視覚障害者観、ボランティアイメージおよび支援意欲との関連— 特殊教育学研究, 39 (4), 33-45
- 国立大学協会 2001 国立大学における身体に障害を有する者への支援と現状に関する実態調査報告書
- 佐藤克敏 2004 LD、ADHD、高機能自閉症の児童生徒及び学生の支援の現状と高等教育機関における課題 大学と学生, 8, 17-20
- 佐藤克敏 徳永豊 2006 高等教育機関における発達障害のある学生に対する支援の現状 特殊教育学研究, 44 (3), 157-163
- 鈴木陽子 2004 大学内の支援(サポート)組織

- に関するアンケート調査報告書
- 全国障害学生支援センター 2002 調査と体験文からみた障害学生の現状とニーズ
- 全国障害学生支援センター 1997 「大学案内97年度身体障害者版」
- 鶴岡大輔 2004 障害学生と高等教育 ノーマライゼーション 24 (4) 10-13
- 殿岡翼 2004 授業でのサポートを充実させるために—大学における障害学生支援の受け入れ状況に関する調査2002より— ノーマライゼーション 24 (4) 27-31
- 殿岡翼 2004 全国障害学生支援センター活動紹介 大学と学生 8, 53-56
- 富安芳和 小松隆二 小谷津孝明 1996 障害学生支援—新しい大学の姿AHEAD日本会議より— 慶応義塾大学出版 Pp. 13-14
- 日本学生支援機構 2005 大学等における障害学生の修学支援の在り方について
- 日本障害者高等教育支援センター 2003 第3回障害者高等教育支援(交流・研究・研修)会報告レポート
- 日本障害者高等教育支援センター 2004 第4回障害者高等教育支援(交流・研究・研修)会報告レポート
- 文部科学省 2005 「我が国の高等教育の将来像(答申)」
- 琉球大学 2003 中期計画・中期目標